消防来ない！逃げ場ない！

南海トラフ巨大地震が発生したら、どんな事態が待ち受けているのか。名古屋大減災連携研究センターの協力で「もし私たちが被災者になったら」を想定する連載企画は、今回から第二部に入る。地震の揺れが去った後、住宅街のみならず、津波から逃れようと登った高台をものみ込む恐れがある地震火災。火災に巻き込まれて命を落とさないための注意点を考える。

（今村太郎）

強い揺れが襲ったのは、十一月中旬の午前五時ごろ。名古屋市中心部の**木造住宅密集地域**（メモ①）に一人住まいの備本みよこさん(七〇)は、ベッドの上で体が何度もジャンプし、「何よ、これ！」と叫びながら目を覚ました。

築四十年の木造平屋の家が音を立てて揺れる。枕元にたんすが倒れてきたが、下敷きは免れた。「助かったのね…」。揺れが収まり暗闇の中、停電用に枕元に置いていたろうそくを探し当てた。足の踏み場もない床のわずかな空間に置いて灯をともすと、家が傾いているのが分かった。通帳などを入れた手提げ金庫を探し、急いで外へ逃げた。

避難所に指定された小学校を目指した備本さん。だが、木造密集地域の細い路地に倒壊した家や電柱が覆いかぶさっている。迂回を強いられ五分ほど歩くと、炎に包まれた家が見えた。

「さちさんの家だわ！」。茶飲み仲間のさちさんも一人暮らし。さちさんは炎上する自宅前で「家が燃えとる…」とぼうぜんとしていた。備本さんの姿に気付くと、「地震で倒れた電気ストーブかコードから火が出たんよ。すぐ燃え広がって」と早口でまくしたてた。

「落ち着いて。私が消防車を呼ぶから」。備本さんが携帯電話で一一九番。すると、「各地で火事が起きており、消防車はすぐ到着できないかもしれません。逃げてください」と言われた（メモ②）。「火事なのに消防車が来ないなんて。どうなっとるの！」

近所の住民が消火器で火を消そうとするが、密接した隣家への延焼が始まった。「うちも燃えてしまう！」「もう無理。お父さん、逃げよう」。隣の家族が焦っていると、別の住民が「向こうでも火が出ている」と大声を上げた。備本さん宅の方向だ。「あっ、ろうそくを消すのを忘れた。まさか！」。乾いた北風が強く吹いていた。四方から火に囲まれ、逃げ場を失った住民たち。「ヒロシ、助けて！」。備本さんは思わず、離れて暮らす長男の名前を叫んでいた。

◆　◆

そのころ、愛知県三河地方の沿岸部に住む長男の弘さん(四五)一家は津波から逃れるため、近くの丘に避難していた。「母さん、大丈夫かな…」。備本さんの心配をしていると、津波の第一波が押し寄せてきた。「さすがにここまで津波は来ないな」。安心していると、薄明るい中、波の表面にいくつかの炎が見えた。

「何だ、あの火は」。津波が運んだ自動車や材木などの漂流物から火が起きていた。津波は丘の中腹でとどまったものの、波が引いた直後、枯れ木に引火した。津波火災（メモ③）だ。乾いた風にあおられ、火は丘へと登ってくる。弘さんら避難していた数十人は口々に叫んだ。「どうやって逃げればいいんだ！」

名古屋市中村区の木造住宅密集地域。大災害時は広範囲に延焼する可能性が高い

メモ① 古くからの木造住宅が集まる地域。特に1981（昭和56）年以前の旧耐震基準で建設された住宅は大地震で倒壊する恐れが高く、火事が広がることも懸念される。路地が狭く火の手が広がりやすい上、消防作業も容易ではない。

メモ② 大半の市町村では、消防車は人口1万～2万人に1台の割合。各地で同時に大規模火災が起きると、消防車が駆け付けることはまず期待できない。

メモ③ プロパンガスボンベや車のガソリン、石油コンビナートから流出した油などが津波で流されながら発火し、火種となる火災。93年の北海道南西沖地震の奥尻島で大きな被害が出たほか、東日本大震災で発生した火災の4割が津波火災だったことが日本火災学会の調査で判明している。

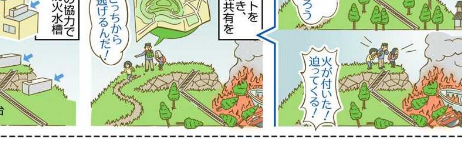
切り取って保存してください

イラスト・井上彰吾

瞬時に延焼 多発／高台も津波で火

電気配線から出火も

地震火災の出火原因



東日本大震災では、消防庁が把握している330件の火災のうち、電気配線からの出火が２割を占めた。担当者は「感震ブレーカーの普及や、ブレーカーを落としてからの避難の徹底が必要」と呼びかける。配電盤や発電機などの電気装置から出火するケースも１割に上った。

倒壊した木造家屋が焼ける火災が相次いだ阪神大震災では、焼損が激しかったため、285件のうち半数が「不明」だった。延焼火災もこの「不明」に含まれるとみられる。出火原因が分かっている火災のうち、ストーブが火元になったケースが９%と最多だった。一方、家電やストーブなどが普及していなかった関東大震災では、かまどや七輪（しちりん）、火鉢などが出火原因となる火災が多かった。

「備える」は毎月第一、第三月曜日掲載です。次回は十二月一日。「想定シリーズ」を続けます。

名古屋大減災連携研究センター協力企画

教えて、センセイ！

広井悠准教授（都市防災）

無理な消火やめ避難を

古い木造住宅が密集する一帯は、建物倒壊などによる火災や延焼の危険性が高い地域です。住民には、通常の住宅街よりも高い防災、減災意識が必要です。

大地震が起きたとき、テレビなどで緊急地震速報が流れたら、ガスこんろやストーブなどがすぐ身近にある場合は、火を消してから安全な場所に避難してください。火気までの距離が離れている場合は、まずは身を守ることを優先してください。夜間の地震で停電したからといって、備本さんのようにろうそくを使わないでください。余震でろうそくが倒れ、火元になる危険があります。

地震後に停電し、電気が復旧した際に火災が起きるケースも目立ちます。例えば、倒れた電気ストーブが熱を発して火元になったり、倒れた家具に押しつぶされたコードに電気が通ってショートしたり。そうならないために、避難する際には可能なら電気のブレーカーを落としてください。地震直後に電気やガスが原因の火災が起きる可能性もあるので、揺れを感知して自動で落とす「感震ブレーカー」や、ガスを遮断する「マイコンメーター」の設置も有効な備えといえます。

木密地域で火災が起きたら、とにかく広い公園などを目指して逃げることが重要です。**やじ馬や無理な消火はやめましょう。右の想定記事のように、自宅や知人宅が燃えると、見入ってしまう人がいます。**関東大震災では、火に囲まれて逃げ場を失った多くの人が犠牲になりました。風が強ければ、延焼速度も速くなる恐れがあります。地域内で火災が同時多発すれば、火に囲まれてしまう危険があります。

木造密集地域は道路が狭いため消防隊が入ってくることもできず、消火作業も限界があります。住宅の天井まで火が回ったり、炎に包まれたりしたら、一般の消火器では消し止めることが難しいので、あきらめて逃げた方が賢明です。

津波火災は、東日本大震災で、千葉県から北海道の沿岸部で百六十件余り発生しました。宮城県石巻市の日和山では、津波から逃れようと高台へ避難した住民に、津波火災が迫りました。防ぐことは難しいですが、自治体と地域の住民組織が協力して高台に防火水槽を設置したり、日頃から複数の避難ルートを調べておくなど、万一を想定した備えを進めてください。

(c) .中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています